

家庭でできる・家族ができる チェックリスト

日常生活でこのような出来事がいくつかみられるときには、一度かかりつけ医や、神経内科・精神科などの専門医療機関に相談することをおすすめします。受診の際は、思い当たる項目(□)にチェックを入れて持参してください。

もの忘れがひどい

- 同じことを何回も言う、聞いてくる
- しまい忘れや置き忘れが多く、いつも探し物をしている
- 言われたことを聞いていないと言い張る



時間や場所がわからない

- 約束、予定の時間を間違える
- 慣れた場所で迷子になる、迷う



意欲がない

- 外出や他人とのつき合いを嫌がる
- 1日中テレビばかりみている
- 今まで楽しみにしていた趣味に関心を示さない、しなくなった
- 口数が少なく、ぼーっとしていることが多い



怒りっぽい、人柄が変わった

- 些細なことですぐに怒り出すようになった
- 自分の失敗を他人の責任にする
- 他人を疑うことが多くなってきた



日常生活であれっと感じることが多くなった

- 同じ物を何回も買って来る
- 料理の味が濃くなってきた
- 新しく購入したレンジなどの使い方を覚えられない
- 季節に合った衣服の選択に戸惑う、手助けを求める
- 持ち物や約束ごとを何回も確認する

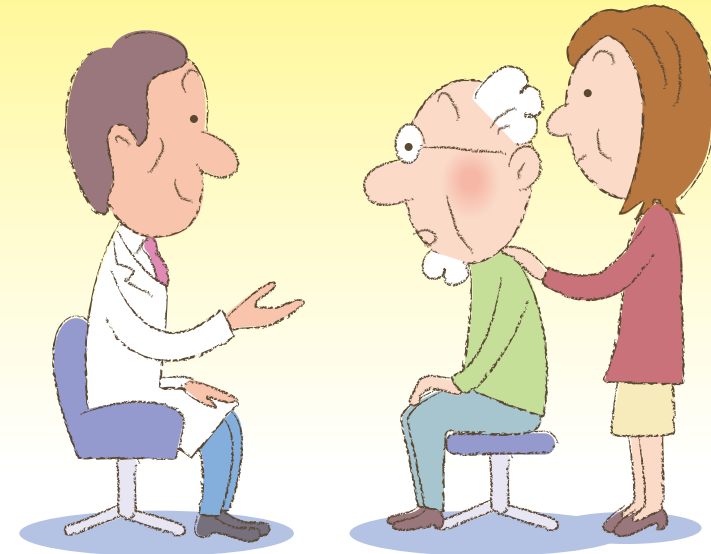


医療機関名

「もの忘れ」が 気になる方々へ

脳の形と働きをみる
画像検査が、病気の早期発見に
役立ちます

へ〜、脳の中を
みることは
できるんですか!



脳の病気は早期発見と早期治療が大切です

財団新和会 八千代病院 神経内科部長
愛知県認知症疾患医療センター長

川畑 信也

「もの忘れ」と認知症は異なります。

「もの忘れ」は、高齢化につれて誰にでもみられるものですが、社会生活や家庭生活に支障をきたす場合には認知症の可能性が考えられます。

下の表は、認知症で見られる「もの忘れ」と、年齢に伴う「もの忘れ」の違いを示したものです。

認知症で見られる「もの忘れ」と年齢に伴う「もの忘れ」の違い

	認知症で見られる「もの忘れ」	年齢に伴う心配いらない「もの忘れ」
もの忘れの内容	自分の経験した出来事を忘れる	一般的な知識や常識を忘れることが多い
もの忘れの範囲	体験したこと全体を忘れる	体験の一部を思い出せない 最近の出来事を思い出せない 覚えていたことを思い出せない(ど忘れ)
ヒントを与えると	ヒントでも思い出せない	ヒントで思い出せることが多い
記憶障害の進行	緩徐に進行していく	何年たっても進行・悪化していかない
もの忘れの自覚	自覚していない(病識なし) 深刻に考えていない	自覚しており、必要以上に心配する

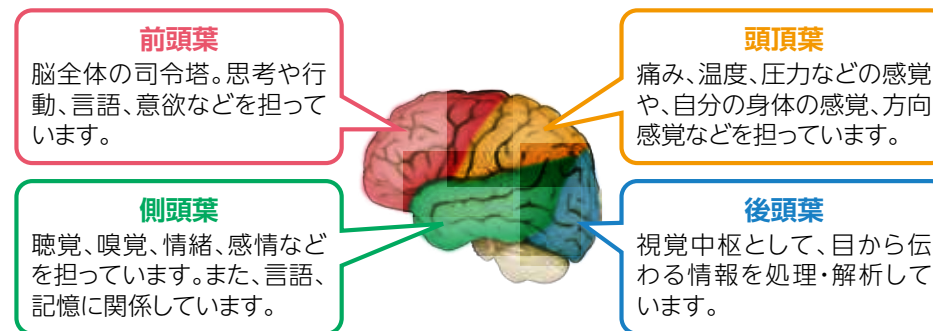
認知症は病名ではありません。病気によって生じる症状・状態の総称です。認知症の原因となる病気は数多くありますが、代表的な病気は以下のものです。

認知症の原因となる病気

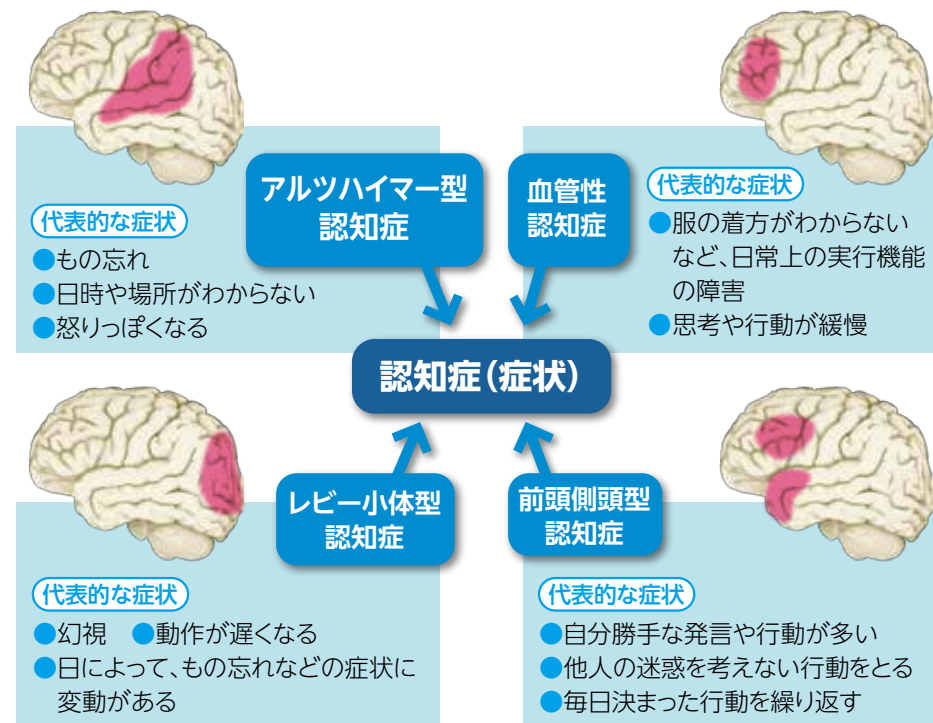
<input type="checkbox"/> 神経変性疾患	アルツハイマー型認知症 レビー小体型認知症 前頭側頭型認知症
<input type="checkbox"/> 脳血管障害	血管性認知症
<input type="checkbox"/> その他の疾患	治療可能な認知症

認知症は、「もの忘れ」とは違いますし、病気の名前でもありません。さまざまな病気によって生じる症状・状態を表します。

脳は場所ごとに違う機能を担っていると考えられています。



下の脳の図は、認知症の原因となるそれぞれの病気で、よく異常がみられる(血液の流れが少なくなっている)場所を示しています。

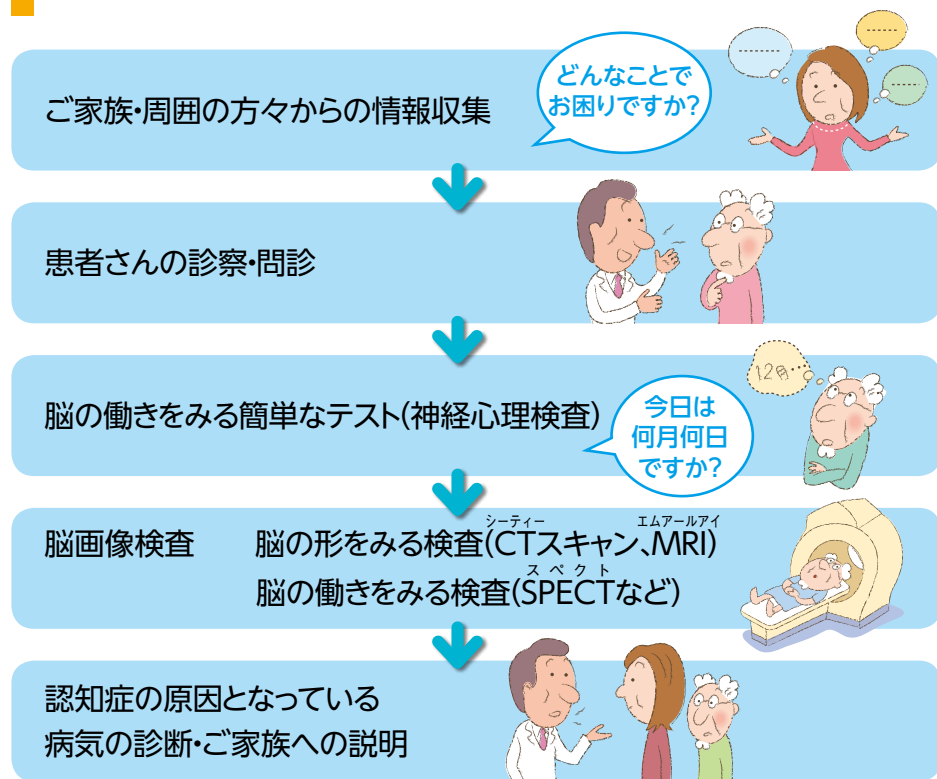


認知症の診断に 脳画像検査が役立ちます。

認知症の原因となる病気を診断するためには、患者さんご本人の診察に加え、患者さんの日常生活をよく知るご家族のお話を伺うことがとても大切になります。

さらに、^{シーティー}頭部CTスキャン、^{エムアールアイ}MRIといった脳の形をみる検査や、^{スペクト}脳SPECTなどの脳の働きをみる検査によって、診断のための重要な手がかりを得ることができます。

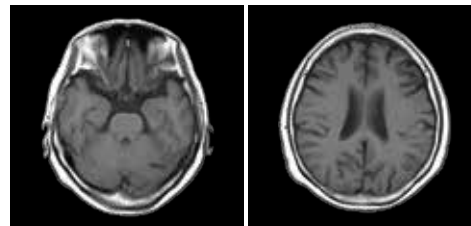
認知症の診断の流れ



健康な人とアルツハイマー型認知症の方では、
脳の形や動きに違いがみられます。

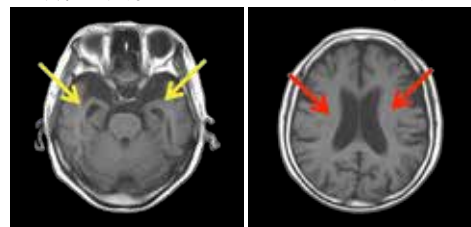
脳の形をみる検査——MRI(エムアールアイ)検査のT₁強調画像

70歳台 女性 健康な人



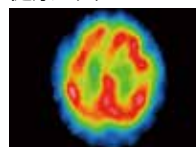
脳を水平に“輪切り”にするように撮影した画像(水平断面像)です。上の健康な人に比べて、下のアルツハイマー型認知症の人の脳では、**黄色い矢印**で示した空洞(側脳室下角)や、**赤い矢印**で示した空洞(側脳室体部)が広がっているなど、異常がみられます。

70歳台 女性 アルツハイマー型認知症

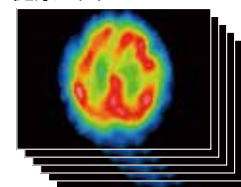


脳の働きをみる検査——SPECT(スペクト)画像

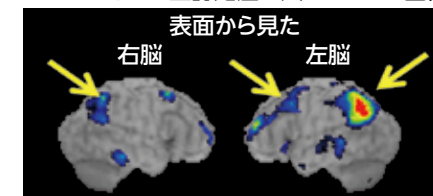
健康な人



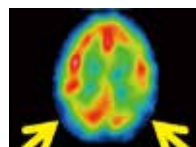
健康な人のデータベース



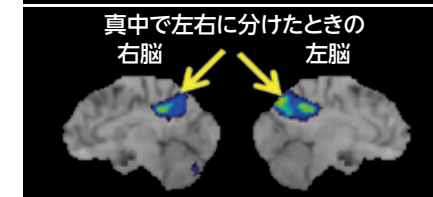
アルツハイマー型認知症の人の3D-SSP画像



アルツハイマー型認知症



比較解析



水平断面像で脳の血液の流れをみています。青や緑が血流の低下している部分です。アルツハイマー型認知症の人では、**黄色い矢印**で示した頭頂葉の後部で血流が低下していることがわかります。

検査を受けた人のSPECT画像と、健康な人たちのSPECT画像(データベース)とをコンピュータで比較して、異常のある部分に色をつけています。アルツハイマー型認知症の人の脳では、**黄色い矢印**の部分で脳血流の低下が認められます。

認知症かな? と思っても 治る病気の場合があります。

認知症と似ている症状がみられるものの、適切な治療によって回復可能な病気もあります。その代表的な病気は、慢性硬膜下血腫や脳腫瘍、正常圧水頭症などです。

こうした病気を早く見つけて早く治療するためにも、認知症が疑われる症状に気づいたら、早めに受診することが大切です。

認知症と似た症状がみられても、回復可能な主な病気

脳外科の病気

髄液と呼ばれる液体が、脳
の中心にある脳室にたまり、
まわりの脳を圧迫します。

慢性硬膜下血腫
脳腫瘍
正常圧水頭症

頭蓋骨と脳の間に出血が生じます。

内科の病気

気道がふさがり、低酸素
または高二酸化炭素状態
になることで、認知症に似
た症状があらわれます。

甲状腺機能低下症
栄養障害、飲酒
慢性閉塞性肺疾患
糖尿病
薬剤による副作用

甲状腺ホルモンの低下により、活動が低下したり、思考が緩慢になります。

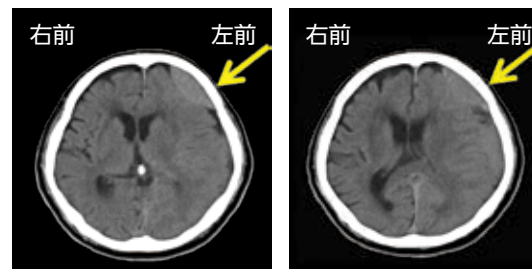
精神科の病気

うつ病・抑うつ状態

しばしば認知症と混同されます。

脳の形をみる検査によって、 手術で治る病気であることがわかったケース

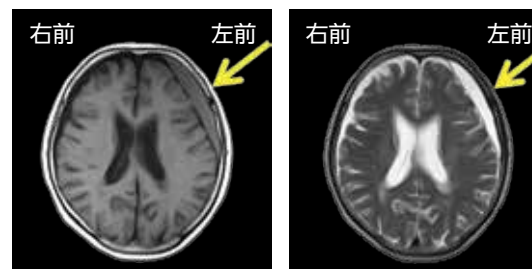
ケース 80歳台、男性、「もの忘れ」と歩行障害で受診し、慢性硬膜下血腫が判明しました。



〔単純CT〕

左前頭葉に、頭蓋骨と脳に挟まれた血腫が認められます。

ケース 70歳台、女性、アルツハイマー型認知症の経過中にMRIで慢性硬膜下血腫の合併が明らかになりました。

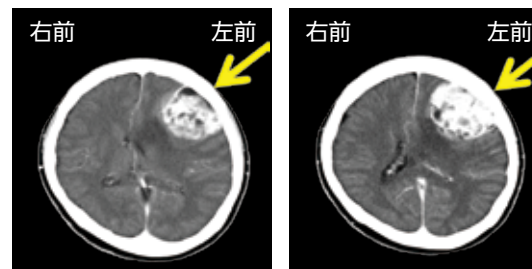


〔MRI検査のT1強調画像〕

〔MRI検査のT2強調画像〕

左前頭葉から頭頂葉にかけて血腫の存在が認められます。

ケース 60歳台、女性、「もの忘れ」の訴えで受診し脳腫瘍が判明しました。



〔造影CT〕

左前頭葉の頭蓋骨に接して、造影剤で染まる球形の腫瘍が認められます。

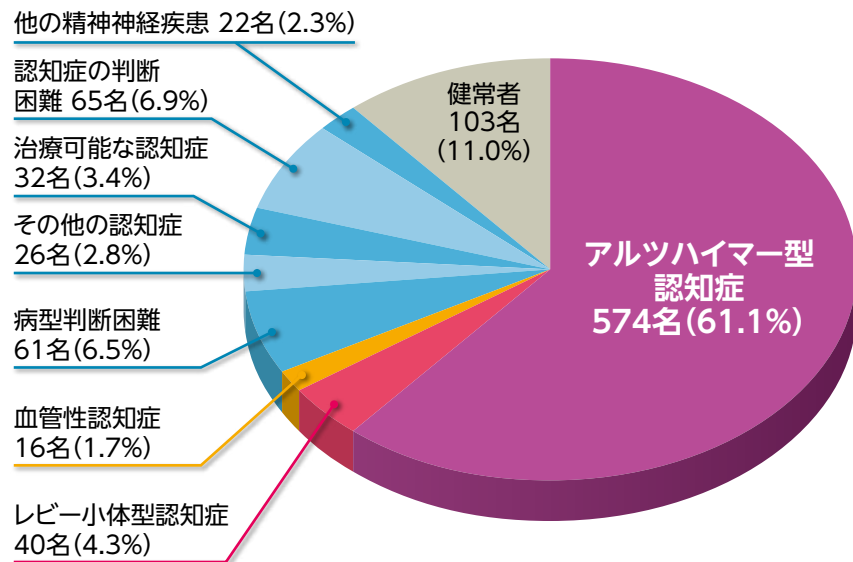
アルツハイマー型認知症の診断では 脳血流画像検査が重要です。

認知症の原因となる病気には、それぞれ特徴的な脳血流の異常がみられます。このため、患者さんの数が最も多く、また症状の進行を遅らせる薬のあるアルツハイマー型認知症を他の病気と区別するために、SPECTなどの脳の働きをみる検査が役立ちます。

もの忘れが心配で医療機関を受診する方の3人に2人はアルツハイマー型認知症です。

物忘れ外来受診939名の診断内訳

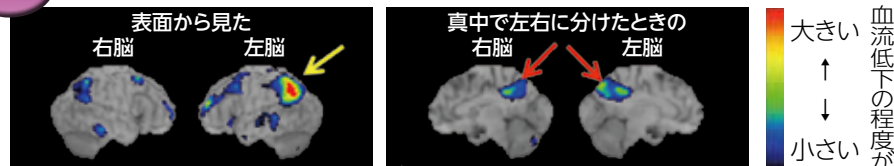
八千代病院 2008年9月～2011年4月



脳の働きをみる^{スペクト}SPECT検査によって、どんな病気が原因で認知症になったのかを調べることができます。

下の画像の矢印は、同年代の健康な人と比べて脳の血流が少なくなっている場所を示しています(3D-SSP統計解析画像)。その場所が、病気によって違います。

ケース 60歳台、女性、アルツハイマー型認知症



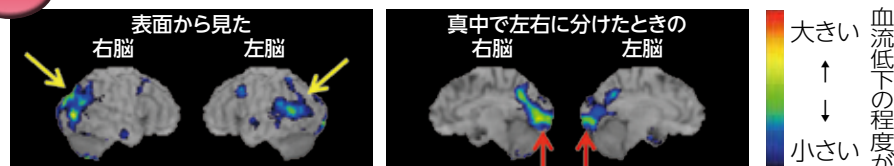
症状

約2年前から「もの忘れ」が目立ち始め、買い物ができず、計算も苦手になりました。1年前から料理をしなくなり、終日自宅でもしない生活になっています。

血流が低下している場所

黄矢印：左頭頂葉の後部
赤矢印：両側の楔前部から後部帯状回

ケース 70歳台、男性、レビー小体型認知症



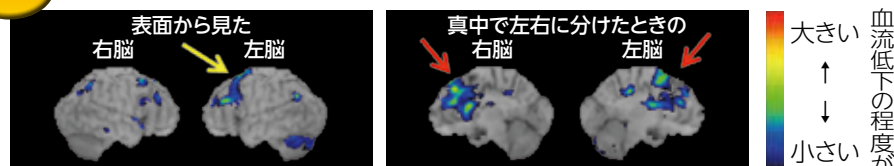
症状

約3年前から「車の中に見知らぬ人間がいる」などの幻視を訴え始めました。同時に動作が遅くなってきました。

血流が低下している場所

黄矢印：右頭頂葉の後部から後頭葉、左側頭葉の後部から後頭葉
赤矢印：両側後頭葉の内側

ケース 70歳台、男性、血管性認知症



症状

6年前に脳梗塞。その後、車を運転中に赤信号を無視するなどの行動障害が出現。約2年前から歩行障害もみられ始めました。

血流が低下している場所

黄矢印：左前頭葉の外側
赤矢印：両側の内側前頭葉から前部帯状回

認知症の原因疾患がわかることで 適切な治療と介護が行えます。

アルツハイマー型認知症でみられる症状の進行を抑えるために、4種類の治療薬を使うことができます。

また、そのほかの認知症についても、それぞれ効果的な介護の方法が研究・実践されています。ですから、認知症の原因となっている病気を知り、適切な対応に努めることで、患者さんの心の安定と、介護するご家族の負担の軽減が望めます。

日本で使用可能なアルツハイマー型認知症治療薬

アルツハイマー型認知症の患者さんの脳の中では、記憶と学習に関係する神経伝達物質「アセチルコリン」が減少しています。また、「グルタミン酸」という神経伝達物質が過剰となり、いろいろな悪さをしています。そこで……

アセチルコリンの分解を抑えて伝達量を増やす薬

ドネペジル塩酸塩

●軽度～高度 1日1回服用

ガランタミン

●軽度～中等度 1日2回服用

リバスチグミン

●軽度～中等度 貼付剤 1日1回
場所を変えて貼付

グルタミン酸の受け皿(受容体)にフタをしてしまう薬

メマンチン塩酸塩

●中等度～高度 1日1回服用 興奮などを抑制

病気の特徴をふまえた接し方を心がけることで、患者さんの気持ちが落ち着き、介護負担が軽減します。

アルツハイマー型認知症

同じことを何回も聞いてくるときは、患者さんの心を別の方向に向けるとよい場合があります。

昼ごはんを食べたばかりのに……



レビー小体型認知症

頻繁に訴える幻視などを頭から否定せず、患者さんが安心するような働きかけをします。

実際はいない人や虫が見えるという……

